

令和7年度

鹿児島県の教育

2・3月号



巻頭言



挑戦と振り返りを繰り返して 学び続ける学校を目指して

一般財団法人鹿児島県校長会館理事
県連合校長協会中学校長部会副部会長

鹿屋市立鹿屋中学校長
永里 護

令和七年の九月、大阪大会以来十八年ぶりに、東京で世界陸上が開催された。私も世界のトップアスリートのパフォーマンスに魅了された一人である。

大会四日目、百メートルハードル決勝を五位でフィニッシュし、インタビュを受取る場面で、泣き崩れながら語る選手の姿があった。その時、彼が発した「何が足りなかったんだらう、何が間違っていたんだらう。」と言った言葉を聞いた時、ある気付きを得た。東京で開催された大舞台を終えた直後の悔しさと前向きさが入り混じるその一言には、結果を受け止め、次に進むための覚悟のようなものを感じた。その姿は、校長として学校経営に向き合う私にも通じるものであり、自分のあり方を振り返る機会を与えてくれるものであった。

教育の現場においても、日々の取組が必ずしもすぐに成果として表れるものではない。だからこそ「何が足りなかったのか。」「何が間違っていたのか。」と真摯に問い直す姿勢が、学校全体の成長につながると思うところである。とりわけ「個別最適化学び」と「協働的な学び」を一体化し、「主体的・対話的で深い学び」を実現するためには、職員一人一人の授業改善が不可欠であり、それを支え

る職員研修の充実が求められる。

校長として、積極的な議論が自然と生まれる職員室、互いの実践を尊重し合える雰囲気づくりを重視している。授業力の向上は、教師の挑戦と安心の両輪によって支えられと考える。挑戦を促すには失敗を前向きに捉える文化が必要であり、それを築くのも校長の役割であると思っている。そのためにも自ら校長としての資質向上に努め、教職員、保護者、地域との信頼関係を構築しながら、よりよい教育環境の実現を目指し、判断の根拠や方向性を丁寧に共有することが大切であると考えている。

東京の大舞台で全力を尽くし、その直後のインタビュで自分自身に問い掛けた選手の様子を思い返すと教育においても同様に、挑戦と振り返りを繰り返すことでしか前へ進めないのだと実感する。学校は教職員も子供も、そして、校長自身も共に学び続ける場である。その営みを支えるのは日々の見直しと積み重ねである。

これからも、学校全体で学びと対話を深めながら、未来を生きる子供たちの力を最大限に引き出せる学校づくりを目指していきたい。

令和8(2026)年 2・3月号

一般財団法人鹿児島県校長会館
〒890-0056 鹿児島市下荒田四丁目32-13
振替 02030-1-3192
TEL 257-9676 FAX 257-9679

(有) アート印刷
鹿児島市東坂元二丁目29-1
TEL 247-1605 FAX 247-2844

* おもな内容 *

巻頭言	1	話のひろば	13
随想	2	読書案内	15
提言	3	趣味・文芸	17
わが校の学校経営	5	郷土の紹介	18
子どもが輝く教育	7	専門部だより	19
心に残るひとこと	9	編集後記	20
ある日の校長講話	11		



随想



海亀から学ぶ生きる力

通山校区コミュニティ協議会青少年部長 西山 繁 美

私の地元にある志布志市立通山小学校から約五百メートルの距離には太平洋に向けて大きく開いた志布志湾があります。毎年六月から八月にかけて志布志湾一帯でもアカウミガメの産卵があります。

通山小学校では例年、海亀の人工ふ化を行っています。産卵時期は、私もですが海亀保護監視員でもある通山校区コミュニティ協議会の役員が毎朝砂浜を巡回し、産卵があれば通山小学校に設けられた人工ふ化場へ卵を移しています。本来、自然の生き物ですので人間が手を加えないのが最善ですが、砂浜の奥行きが狭く、台風襲来時は、浜砂とともに卵が流出する恐れがあるので移しています。

通山校区でアカウミガメの人工ふ化が始まったのは昭和四十九年です。当時から海亀の産卵が減少傾向にあり、それを危惧した地元の方が始められました。その後、小学校には人工ふ化場が造られ、ふ化した子亀は児童らにより海へ放流されていきました。私も放流した児童の一人でした。

それから時を経て、諸事情により小学校での人工ふ化は途絶えましたが、平成十八年に小学校のPTAが中心となり児童、学校、地域が一体になっての新しい海亀保護活動が始まりました。小学校には保護者の自主団体である「おや

じの会」が新しい人工ふ化場を造りました。それ以降、産卵された卵をふ化場の砂の中に入れることや、ふ化した子亀たちの放流を子どもたちは毎年体験しています。

保護活動再開のきっかけは、時代が昭和から平成に変わり幾年か経ったころ、全国で少年少女が加害者または被害者となる凶悪事件が多発した時期のことです。決して他人ごとでないと感じた「おやじの会」は、地域ぐるみで子どもたちの健全育成が必要なのではないかと考え、特に「命」についての教育が必要なのはと話し合われたことからです。また、国際的な保護生物であるアカウミガメが地元の海岸で産卵していることから、海亀の保護活動を通して「命の教育」を目的に活動が始まりました。私もその時から継続して海亀の保護活動に関わっています。

産卵時期は毎朝五時から海岸の巡視を行います。海亀の足跡があれば砂を掘り起こして産卵の有無を確認します。産卵が無いときもありません。ゴミや流木が邪魔したり、たき火の跡があったりすると母亀がここでは産めないときあらめて海に帰るのです。成体の海亀は体重が百二十キログラムほどと言われています。安心して産卵できる場所を求めて重い体で砂浜を這いまわります。数百メートルに及ぶこともあります。

略歴

二〇〇八―二〇〇九年 志布志市立通山小学校PTA会長
二〇一三年 志布志市立有明中学校PTA会長
二〇一七―二〇一九年 鹿児島県立鹿屋工業高等学校PTA副会長
二〇二一年より 通山校区コミュニティ協議会青少年部長

母亀には脱帽の思いです。産卵が終わると我が子とはお別れです。同時に産み落とされた卵には自力で生きることが課せられるのです。ふ化場では産卵時と同じく地下六十センチメートルに卵を埋めます。温度や水分により未成熟で終わる卵もあります。殻から出られたけど、そこで命が尽きる子亀もいます。地上に出てくることを「脱出」と言います。タイミングが合えば脱出も子どもたちと観察します。子亀全員が図つたかのように一斉に脱出してくるのですが、出遅れて砂に埋もれ息絶える子亀もいます。子どもたちには命は尊いもので貴重なものと感じてほしく、ふ化や脱出が叶わなかった卵や子亀も見てもらいます。脱出した子亀を子どもたちや地域住民の方々と海岸から放流するので、生まれの間もないのに独りぼっちで生きていく子亀と比べて、普通に生活できる自分たちがどれだけ幸せなことなのかを子どもたちに話してから放流しています。

海亀の保護に関わって十九年が経ちました。私と同様に海亀の保護活動を体験した子どもたちが保護者となって、また海亀の保護活動に関わっています。

この活動が末永く続くことを願うばかりです。



「へんしーん」と

「自分が自分の先生」と「昔話」

松原なぎさ小(始伊) 永山 達 治

一 はじめに

今年度、松原なぎさ小学校に着任し、順調にいけば、役職定年まで残り約一年となった。校長として最後になるであろうこの学校で、何ができるのか、何をしなければならぬのか、これまでの転勤当初とは幾分違う思いをもちながら、日々職務に当たってきた。

「提言」というタイトルがついているが、皆様方に提言できるような力は持ち合わせておらず、学校経営において、これまで自分の中でこだわってきた、また、最後までこだわりたい、今の私の拙い思いや考えを「キーワード」してお伝えすることにする。

二 へんしーん

一学期の始業式で必ず子どもたちに話す言葉が「へんしーん」である。学校経営の基盤として、この言葉を伝える。子どもたちの心の中に芽生える「こんな自分になりたい。」「こんなことができるようになりたい。」という前向きな思いを育みたいとの思いである。子どもたちの瞳の奥に宿る、未来への希望、成長への意欲こそが、学びの原動力だと考え

る。その思いを象徴し、子どもたちの日常に浸透させてきた言葉が「へんしーん」である。

ある日、担任が校長室に来て、

「私の学級の教室に来てください。そして、Aさんの机を見てください。」

と笑顔で話した。早速、教室に行くと、Aさんの机に一枚の紙が貼ってあった。その紙には、「じぶんでへんしーんしよう」というタイトルが付けられ、二つのことが書かれていた。今の自分という殻から一歩踏み出し、理想とするよりよい自分へと果敢に変わっていくこうとするAさんの思いが、一枚の紙に記されていた。

三 自分が自分の先生になる

「へんしーん」とともに、長期休業に入る前に子どもたちに必ず伝えてきた言葉がある。それは、「自分が自分の先生になる」である。子どもたち自身が「自分の人生の主人公」となり、自らを律し、自立していく力を育むことを大切にしたい。この思いを込めて、子どもたちに、この合言葉を伝えてきた。

長期休業は、学校という規律ある環境から

離れ、自由な時間が増える期間である。この自由な時間を有意義な時間にするために大切なことは、誰かに言われたからやるのではなく、自ら考え、判断し、行動する力、すなわち自立の心である。

子どもから暑中見舞いが届いた。夏休みの思い出やがんばっていることが書かれていた。そして、自分の似顔絵に吹き出しをつけて、「自分が自分の先生になる」と書いてあった。

四 昔話

始業式や全校朝会などで、本の読み聞かせや紹介を多くしている。最近「昔話」を選ぶことが多くなっている。昔話の魅力をこれまでは「言うに言われぬ教え」だと考えていたが、ある本と出会って、今は「登場する人物たちの様々な生き方」が昔話の魅力であると考えようになった。

「だんまりくらべ」という昔話を話したときに、一人の子どもが校長室に来て、

「わたしだったら、じゃんけんで誰がもちを食べるか決めるかな。だって、その方が早し、どろぼうに食べられないからです。」と笑顔で伝えてくれた。

五 おわりに

令和八年度が最後の一年となる。大したことはできないが、子どもとともに、私自身も「へんしーん」することを最後の一日までめざし、松原なぎさ小学校の子どもたちの未来へ力強く進む力を伸ばしていきたい。



つながりの中で育つ、花岡学園の学び

花岡中(隅) 吉岡 康 弘

一 はじめに

花岡学園では、「つながり」を大切にした教育を通して、子どもたちの成長を地域とともに支えている。春の入学式では、新中学一年生が新小学一年生の手を優しく引いて式場へと歩み入る。この光景は、学園に根づく「つながりの循環」を象徴する場面である。かつて自分が手を引かれた記憶を胸に、今度は誰かの支えとなる。こうした関係性が自然に育まれているのが、花岡学園の特色であり、子どもたちの心の中に温かな記憶として刻まれていく。

二 小中一貫教育と異年齢の交わり

本校は、小中一貫教育の特性を生かし、子どもたちの九年間の学びをつなぎ、育てる場である。学年の切れ目を越えて日々の生活や学習が連続していることで、子どもたちは自らの成長を継続的に実感しながら、不安なく次のステップへと進むことができる。これは、学びの連続性が確保された環境だからこそ可能な、一貫校ならではの強みである。

この学びは、教職員の密な連携によって支えられている。小中の教員が学びの道すじや指導の視点を共有し、子ども一人一人の歩みに寄り添いながら、その成長を学園全体で見

守っている。教科指導のみならず、生活面や進路面においても一貫した関わりを通して、子どもたちの安心感と自己肯定感が育まれている。こうした関係性の積み重ねが、子どもたちの挑戦する力や人との関わりを築く力につながっている。

また、入学式をはじめ、集団宿泊学習・体育祭・学園祭などの小中合同行事を年間を通して実施している。異年齢の子どもたちが協力して取り組む経験は、リーダーシップや思いやりを自然に育む。毎月行われる全校朝会では、小学一年から中学三年までが一室に会し、互いの存在を感じながら学校生活を共有している。

さらに、日々の清掃活動も場所によっては異年齢グループで行い、年齢を越えたつながりが日常に根づいている。

三 地域・大学・自然との共創

こうした教育実践を更に豊かにしているのが、地域との連携である。校区内にある鹿屋体育大学との連携により、大学の先生や学生と共に授業や活動を行い、専門的な学びや人との出会いを通して、子どもたちの夢やキャリア意識が育まれている。大学生との交流は、子どもたちにとって憧れや刺激となり、将来

への展望を広げる貴重な機会となっている。また、国立大隅青少年自然の家との連携による野外活動も本校の大きな特色である。登山やカヌー、野外炊飯などの体験を通して、子どもたちは自然とのつながりの中で、主体性と協働の精神を育てている。自然の中での学びは、教室では得られない感性や生きる力を育む場として、子どもたちの心を大きく揺さぶる。

さらに、学校・家庭・地域の三者が連携して学校づくりを進める「学校運営協議会」の存在が、こうした活動を支えている。地域の皆様と教育課題を共有し、学校運営の方針に地域の声を反映させるこの取組は、「地域と共に育つ学校」の中核である。学校運営協議会の活動は年々充実し、学校行事の支援や地域講師の派遣、学びの環境づくりなど、多方面で子どもたちの成長を支えていただいている。

四 おわりに

教育活動の共通基盤として機能しているのが「花岡スタンダード」である。あいさつ・時間・責任・協働といった柱を明文化したこのシートを、学校・家庭・地域の大人が共有し、子どもたちの育ちを共に支えている。この一貫性こそが、花岡学園ならではのあたたかな学びの土壌であり、子どもたちの心の根を育てる力となっている。

今後も、「学びの連続性」、「異年齢の交わり」、「地域・大学・自然の家との共創」、そして「学校運営協議会」や「花岡スタンダード」を基盤として、全ての子どもたちの成長を地域とともに支えていけるよう、取組を続けていく。



一歩一歩 歩みを進めていく

糸木名小(大) 引地 幸二

一 はじめに

前年度着任し、本校の強みと弱みは何であるか、一年かけじっくり見てみた。本校の強みが「チームワーク」と「業務に対する真摯な取組」であることはすぐに分かった。子供たちも素直で、真面目な取組が目立っていたが、その反面、自分たちで判断し行動するという場面は、あまり見られなかった。完全複式の極小規模校という特性から、授業では自分たちで考え行動するよさがよく見られるにもかかわらず、普段の生活や議論する場面になると、とたんに黙り込んだり、大人の指示を待ったりと、そのよさが影を潜めてしまっていた。この傾向は職員にも当てはまった。多くの仕事を抱える極小規模校では、仕事をさばくために前年踏襲が常態化し、何か課題が出てきても、小回りの利く本校では、その場で臨機応変に対応していた。しかし、真面目であるが故、適当にはできない。結果、多くの時間を要してしまうという悪循環が見られた。そこで、本年度の学校経営の中核となるテーマを「自立(律)性と同僚性で自走できる集団」、

「自己選択と自己決定をあらゆる場面で」、「働き方改革の推進」の三つとした。

二 自立(律)性と同僚性で自走できる集団

「自走」が自分勝手な解釈による動きにならないよう、年度初めに、経営ビジョンを丁寧に伝え、共有し、常に目標に立ち返るようにした。ルールは守りつつ動き出しは一人で。その後は全員で連携して進める。校長は基本見守り、方向性がずれた時だけ助言するようにしている。この動きは学級でも同じにし、担任には方向性がずれる時以外、見守るようにしてもらっている。

三 自己選択と自己決定をあらゆる場面で

一例として宿題を取り上げ、従来のやり方で本当に子供たちの力になるのか考えてもらった。県が推進するマイゴールチャレンジの考えとも合致したことで、子供たちが自分で何をすべきか考え、実行する形に変わってきた。このことは、授業のやり方を変えるきっかけともなった。宿題以外にも、生活のあらゆる場面で、自己選択と自己決定の機会を設けてもらうようにしている。これは、職員に

対しても同じで、何かの相談に来た場合でも、こちらから答えを言わず、職員の中から答えが出るまで待つようにしている。どうしても出ない場合は選択肢を用意するが、自分なりの答えが出てきた場合は、そちらを優先するようにしている。

四 働き方改革の推進

働き方改革をより難しくしていたのが、「よい授業をしたい」という職員の誠実な思いであった。そこで、まずタイムマネジメント力の育成に取り組んだ。明日、元気に子供たちの前に立つために、定時内で仕事を済ませる工夫を伝え続けている。例えば、仕事に優先順位を付けること、提出物は先送りにしないこと、教室掲示は見栄えより教育効果を上げること、重きを置くことなど、校長室だよりを通して発信している。本人の努力ではどうしようもない部分や絶対的な時間不足に関しては、全員で協議し、会議時間の短縮や会議そのものの削減・統合、日課表の変更、校務DX化等を推し進めながら、更なる改善を現在も模索している。

五 おわりに

まだまだ課題は山積みであるが、学校経営には、一瞬で全ての課題が解決する魔法のような特効薬はないと思っている。昨日より今日、今日より明日と、遅々とした歩みであり、時に後退することもしばしばではあるが、一歩、一歩、前に進んでいこうと思う。



「笑顔輝き 夢かなう」魅力ある高校を目指して 有用感を持ちながら、生徒・職員がともに成長できる学校に

曾於高 西中間 明 弘

一 はじめに

本校は「大隅地域高校振興事業」により、財部高校、末吉高校及び岩川高校の三校を統合し、平成二十六年に開校した創立十二年目の若い学校である。文理科・普通科・畜産食農科・機械電子科・商業科という県内の公立学校としては唯一、五つの学科が併置され、校是「笑顔輝き 夢かなう曾於高校」のもと、三校の歴史と伝統を受け継ぎながら、地域に根ざし愛される学校として、新たな時代の創り手に必要とされる資質・能力の育成に向けて取り組んでいる。

二 学校経営方針

- (一) 「地域に愛される学校」：地域の信頼と期待
 - ・魅力ある人材の育成（情操・教養・社会性）
 - ・多様な進路目標の実現（主体性・積極性）
 - ・地域・保護者との連携と積極的な魅力発信
- (二) 「笑顔溢れる学校」：伝統継承と新たな取組
 - ・自己管理能力・自己表現力の育成
 - ・多様性の受入れと主体的に考え行動する力
 - ・チャレンジする気持ち、失敗から学ぶ姿勢
 - ・学科の枠を超えた教育活動の充実
- (三) 「夢を実現させる学校」：教員としての職責
 - ・教員の自己研鑽・ワークライフバランス・業務改善

三 曾於高校総合支援対策事業

曾於市唯一の高校存続のため、保護者の負担軽減、高校教育の充実・活性化に資し、曾於市

四 特色ある教育活動

の教育の振興を図ることを目的とした支援
 ①制服等購入補助 ②中学校スクールバス活用
 ③遠距離通学費補助 ④資格取得支援 ⑤通信講座受講料補助 ⑥笑顔輝き夢かなう事業（高校重点施策事業支援）

曾於高校生としての誇りを胸に、同じ志を抱いた仲間・尊敬できる仲間と切磋琢磨し、あらゆる教育活動に主体的に取り組んでいる。

(一) 「文理科」国公立大学・難関私立大学進学希望者。七限授業。少人数授業。

(二) 「普通科」進学から就職まで幅広い進路を実現。文理科と合同での探求活動「曾於学」。

(三) 「畜産食農科」食を支える人材を育成。畜産・食品・栽培の三コース。

(四) 「機械電子科」「ものづくり」の知識・技能を身に付けた人材育成。多くが就職希望。

(五) 「商業科」地域経済開発・会計の二コース。進学から就職まで幅広い進路志望を実現。

五 生徒募集に向けた取組

曾於高校の魅力と生徒たちの頑張る姿を知ってもらうため、学校だより「曾於高JUMP!」を年四回発行。曾於市内の三中学校と全家庭に配布。また、国道沿いに横断幕を設置。小中学校への出前授業等、曾於市教育委員会も含め、地域の小中学校とも積極的な交流を図っている。（中高連絡会二回、体験入学（夜）二回、オー

六 プレンキャンパス一回。） おわりに・むすびに

学校全体としての充足率はここ数年、五十七・五％で推移している。スクールバスを利用し、都城市・霧島市・鹿屋市・志布志市の高校に通う生徒も多く、曾於市内の三つの中学校からの本校への進学率は四十パーセントに満たない。少子化が進む昨今、残念ながら、自治体の協力・支援なしでは地方の公立高校の存続は難しい。

本校職員は、多様な生徒の学びに応えるべく、学科の特徴を生かしつつ学力差の大きな集団に向かい合っている。教育の在り方を模索しながら悩むことも少なくないが、ここでの貴重な経験は、今後大きな変化を求められていく教育現場の中で必ず生かされるのだと信じている。

大学進学を目指してガッツリ勉強したい生徒、部活動や学校行事も楽しみながら進学・就職したい生徒。若い世代が高校に望むことを的確に把握しながら、多様な要望に応えられるだけの進路実績や環境は整いつつある。質の高い教育を提供しているという自負もある。ただその一方で、少子高齢化が進む地域の中で、成績上位の生徒は都城市の高校に進学するという過去から続く流れを変え、統廃合前の学校に対するイメージを変えていくことの難しさ、先が見えないが故の苦しさもある。

三年間という限られた時間の中で、新たな価値の創造に向けて自ら課題を発見し、多様な人と協働しながら、今しかできないこと、ここでしかできないことに一所懸命取り組んでいくことが、曾於高校生一人一人の人間の成長と、魅力的な人材の育成に繋がっていくと信じながら、地域に根ざした学校として、地域の期待に応えるべく、生徒たち一人一人の夢の実現のために教職員一丸となり魅力ある高校教育を追求していきたい。



ああ妙円寺小 わが母校

妙円寺小(日) 有村 恵

一 はじめに

本校は、昭和五十九年に妙円寺団地にある唯一の学校として開校し、四十二年目を迎える。現在児童数は四百五十五名である。また、閑静な住宅街の中には公園も多く、恵まれた生活環境である。さらに、保護者や地域の方々の学校教育への関心は高く、協力的で、PTA活動や校区公民館活動が盛んに行われている。

二 取組の実際

本校では、学校教育目標を「ふるさとを思い 心豊かでたくましく 学びに向かう児童を育てる」と設定している。学校では、絆づくりと居場所づくりで自己肯定感を育む教育の推進を図り、ふるさとを知り、ふるさとを大切にす児童の育成を目指している。学校と校区が連携し、活動に取り組むことを通して、「妙円寺を子供たちのふるさとに」を合言葉に教育を展開している。

(一) 伊集院饅頭づくり体験
日置市教育委員会では、施策の基本方針として、「郷土ひおきの資源を生かした『風格ある教育』の推進」を進めている。その中で、第三学年では、総合的な学習の時間に位置付けた伊集院饅頭づくりを、地域の

菓子店の協力により体験している。活動では、まず、伊集院饅頭の歴史について学ぶ。次に、材料の説明を受け、全ての工程を手作業で行う。出来上がった品は、自宅に持ち帰り、保護者に披露した上で食している。近年、子供たちの家庭では、口にすることが少なくなってきたおり、郷土の伝統菓子にふれる有意義な体験活動となっている。

(二) 乗り入れ授業の実施

日置市教育委員会では、「小中一貫教育」の充実による学力向上の推進を掲げている。進学先の中学校区と連携し、年三回職員研修を行っている。その中の取組の一つとして、中学校からの乗り入れ授業を六年生で行っている。中学校の学習の進め方を知る上で貴重な体験となっており、中一ギャップの解消にもつながっている。また、共通実践事項「授業の受け方五か条」を小中間で共通して取り組んでおり、進学後の児童のスムーズな学びの移行にもつながっている。

(三) 学校運営協議会との連携

学校運営協議会が主体となり、「妙円寺小学校サイエンスクラブ」が発足した。主な活動は、校区内に居住する理科等に造詣

が深い方を講師として招聘し、子供たちが理科の楽しさや面白さ、不思議等を体験的に学ぶ活動である。第二土曜日の午後から二時間程度、本校を会場に行っている。現在四年目を迎える。年間八回程度の活動を行っており、毎回、概ね三十人程度の参加者がある。校区の有志が実行委員を務めており、活動の計画・立案・運営を行っている。

(四) 日新公いろは歌の暗唱

本年度から、日新公いろは歌の暗唱に取り組んでいる。いろは歌の暗唱と意味の暗唱を行う。校長が、検定者となり検定表を作成し、昼休みに校長室で行う。進級は、十級から十段と進む。そして、歌と意味の全暗唱ができた児童は名人として認定する。日置市の郷土の先人である日新公のいろは歌を暗唱することで、現代にも通ずる人としての生き方を学ぶことはもとより、暗唱を通して、大脳の活性化にもつながっている。本校の新たな教育的な伝統として継承・発展させていきたい。

三 おわりに

本校は、造成された団地内にある学校故に、郷土の教育的な資源が備わっていない。だからこそ、新たな教育的な財産を創出し、それを教育課程に取り入れ、妙円寺小学校ならではのふるさと教育まで高めたい。そして、棕鳩十作詞の校歌の一節、「ああ妙円寺小わが母校」と、本校に通う全ての子供たちが思えるようになるための教育を学校・家庭・地域と連携し、全校態勢で真摯に進めていきたい。



進んで学び、よりよく生きる

深川小(隅) 福満健二

一 はじめに

本校は、曾於市の中心から北に車で十分ほどのところに位置し、標高二百六十mほどの自然豊かな環境にあり、今年で創立百五十二年を迎える歴史と伝統輝く学校である。児童数は三十八人、低学年は単式、中・高学年は複式、特別支援学級二学級、計六学級の小規模校である。

教育目標は「進んで学ぶ子どもを育てる」である。これは県が進めている学習者主体の授業の実現や本市を上げて取組んでいる「学びの共同体」の推進などを踏まえて掲げている。進んで学ぶ意欲は様々な人との交流や豊富な体験活動が基盤になる。地域と一体となって教育を進めている本校の強みを生かし、意図的・計画的に推進できるよう教育課程の改善を加えながら日々の教育を進めているところである。

二 本校の取組

ふるさとでの思い出は、そこで育った人間の生涯の心の支えとなる。小学生時代の子どもの豊かな体験は自己肯定感やアイデンティティの涵養に直結している。豊かな学びの体験は、子ども時代の学級での友達どうしの望ましい関係性や保護者や地域の方々との

豊富な交流・体験活動により育まれるものではないだろうか。子ども時代の様々な体験を通し、五感や体験をフルに使った豊かな学びの場を提供していきたい。

三 取組の実際

(一) ふるさと深川教育

いわゆる「郷土教育」であるが、郷土愛の育成を通して、学ぶ意欲と望ましい関係性づくり、生活に根ざした学習への探究心の育成の基盤づくりもねらいにしている。本校では例年、地域の高齢者施設及び社会福祉団体と連携を取り、認知症サポーター育成プロジェクトに参加し、学習した内容を寸劇にまとめたり、作文やポスターコンクールへ出品したりしている。他にも本年度は歴史研究家の先生をお招きし、地元深川の歴史についての講話をしてもらったり、志布志港湾事務局の方から港の仕事と生活とのつながりについてのお話をしてもらったりして探究活動を行った。

(二) PTAとの連携

本校保護者のほとんどは深川小の卒業生である。お互い顔見知りのため、少ないながらも活発なPTA活動を展開している。毎年夏休みの始めに親子キャンプを実施

し、そうめん流しやプール開放、お化け屋敷やレクリエーションなどを行っている。実行委員でじっくりと準備し、工夫を凝らした楽しい活動をしているので、大人も子どもも毎年楽しみにしている。親子で本気で楽しむ体験を通してふるさとでのよさの認識やキャリア教育の基礎となる心情が育っているのではないだろうか。

(三) 地域等との連携

例年、地域の方々の協力を得ながら、水鉄砲作りや七夕飾り作成、昔遊び、地域の福祉大会への参加などを実施している。授業時数の制限や指導計画との整合性が取りにくい内容は、週末などに、隣接する児童クラブの行事や地域の敬老会の活動の一環として行っている。また、海のない本校区でも海産物に親しんでもらおうと、大隅地区の漁協及びPTAと連携して毎年「おさかな教室」を実施している。プロの料理人の指導のもと調理した魚料理は絶品で毎年大好評である。

四 おわりに

友達関係の固定化や主体性の不足など一見ネガティブな課題が多いように見える小規模校であるが、小規模校の強みは何か、本校区ならではのよさは何かというポジティブなアプローチで多くのアイデアが生まれてくる。子どもたちにとってこれらの体験活動は楽しい思い出となるだろう。学ぼうとする意欲はよりよく生きようとすることでもある。与えられた環境や人間関係の中で進んで学ぼうとする子どもの育成にこれからも励んでいきたい。

心に残るひまわり



神様からの贈りもの

前之浜小(市) 佐々木 恵 美

東シナ海を望む奄美大島の学校で

「私は、神様から何を贈られたのかなあ。」
休み時間に子供がぼつりと話し始めた。「かみさまからのおくりもの」という本に、神様が生まれてくる一人一人の赤ちゃんに、贈りものをくださるといってお話があったとのこと。

幼い頃に母親から腎臓移植を受け、長い入院生活を送った彼女は、その後の作文にこう綴った。「私は神様から『病気に負けない心』をもらいました。」注射も薬もリハビリも頑張ったから、元気に学校に行けるようになって嬉しい。みんなのように走ることができなくても、リコーダーや水泳が少しづつできるようになって嬉し

て嬉しい。前向きで、笑顔を絶やさない彼女と青い海に、毎日励まされた。

さらに、こう続けた。「神様は私に『夢をもつこと』をプレゼントしてくれました。私は大きくならパソコンを使うお仕事がしたいです。夢のことを考えると心がうきうきして、頑張ろうとする気がわきます。神様からの贈りものを大切にしたいです。」

汗を拭おうともせず、不自由な手で鉛筆を握りしめ、一文字一文字を書き込む横顔を思い出すと胸が熱くなる。もし、あの当時、一人一台端末が整備されたら、どんな学びができていたのだろう。喜んだだろうなあ。彼女と共に過ごした三年は、学ぶことの多い貴重な時間だった。

「何でもやれば、ちよつとずつできるね。」
「自分からやろうとするからだよ。お母さんはあなたが夢をもってくれたことが嬉しい。」
愛情深いお母様の言葉も深く心に残る。

あれから二十年余り、学校だよりや全校朝会、家庭教育学級などで、彼女の言葉を紹介している。命の輝き、家族の絆、努力の尊さ、そして、夢をもつことの力強さが詰まっているからだ。全ての子供たちが「神様からの贈りもの」に付き、健やかに成長してほしいと願う。子供たちが強みを生かし伸ばしていく環境を整えることが、私たち大人の役割。私も神様から贈られた「子供の成長が嬉しい心」を大切に、責任を果たしていきたい。

「負けるが勝ち」

その言葉を意識して

飯牟礼小(旦) 友 生 雅 夫

校務に追われ、ゆとりがなかったとき、教頭先生が掛けてくださった「負けるが勝ち」という言葉を思い出す。目先の勝ち負けにとらわれず、状況を冷静に判断し、相手に譲ることが、長い目で見れば自分の成長につながるということだった。

教頭先生は、よく声を掛けてくださり、忙しいような姿を見て、「焦るな」と、伝えたかったのだと思う。それから二十年経ち、困難な場面も、目の前の課題だけを解決するのではなく、見通しをもったり、最終的な展望をもったりしながら対応するようになったと感じている。

校長になり、対応が厳しい場面があった。自分の考えはあったが、相手の話を聞く必要性を感じた。根気も必要だったが、他の校長先生や関係機関の方々に助言をいただき、答えを見つけていった。人の力を借りる、人を頼ることで、自分の気付かない視点から物事を捉えることができた。時間がかかったが、焦らず対応できたのは、その教頭先生の言葉のおかげだと思ひ、感謝している。

役職定年までまだある。学校を見渡し、職員や子どもたちに、どのような言葉を掛けてあげられるだろう。自分も救われたように、思い悩む人たちを、救ってあげられる校長になれたらと思う。

お前は、ヤンマーエンジンだな

田之浦小(隅)川 邊 真人

私は、山間の小学校で、のんびりとした小学生時代を過ごしました。下校のときは、少し寄り道をして土手を上がり、うべ、あげび、サンシユなど山の恵みを収穫し、食べながら帰りました。実に楽しい思い出です。

しかし、中学生になると事態は一変します。部活や校外模試等で、学校外の同級生たちと競うという経験が始まりました。対外試合に出場すれば、こてんぱんにやられました。校外模試は、普段のテスト以上に手こずりました。おまけに、当時は、模試の解答集の最後のページに、高校合格の目安点が表記され、自分の入学した高校には、ほど遠い有様で、愕然としました。そんな私でしたが、当時の担任の先生は、いろいろな話や指導をしてくださり、できの悪い私にとことん付き合ってくださいました。時に

は、夜の家庭訪問までされ、「真人、勉強をしているか。」と、部屋を覗きにいらつしやる始末。さすがに、そのときは驚きました。

しかし、私の今があるのは、この先生の導き（熱い思い？）があつたからだと思うのです。先生っていいな。テレビでも金八先生をはじめ多くの先生シリーズ真つ盛り。いろいろな目標も、このとき、もつことができました。

担任の先生が、ある日、そつと私に伝えてくれました。

「お前は、ヤンマーエンジンだな。このエンジンはな、かかりは悪いが、一旦かかると、それはよく動く。そして丈夫だ。お前とそっくりだ。」その言葉は、本当に嬉しく、自信になりました。数十年経つた今でも心に残る言葉であり、私を支える言葉のひとつでもあります。

私は、時代が変わっても、子供の本質は変わらないと信じます。あるとき私の心に灯をともした先生の御指導のように、自分の指導もそうありたいし、子供の心に灯をともし職員を職場でも育てたいと思います。



テレビから得た自由律の教訓詩

—三年B組！〇八先生！から学ぶ—

尾母小(大) 廣 栄 次

テレビっ子であつた幼少期。テレビと共に歩んだ子供時代。その後の人生で強く心に残り大切にしている言葉も、ドラマの中から学んだ。

昭和五十七年というから、私が十五歳、中学三年の時か。「三年B組貫八先生」という川谷拓三さん主演の学園ドラマ。神崎貫八先生が生徒とぶつかりながら共に成長していくお決まりの学園物である。貫八先生は種田山頭火をこよなく愛し、山頭火の詩が引用されて、話は展開していく。私はこのドラマがきっかけで、種田山頭火が好きになった。当時は、ドラマに出てくる山頭火の詩は全て覚えるほどに。

山頭火は、明治から昭和初期にかけて活躍した自由律俳句の俳人である。貫八先生と同様の雰囲気―家業の破産や離婚、出家して放浪の旅に出るなどの波瀾万丈な生き方―に、思春期の私は奥底で憧れがあつたのかも知れない。代表作に「分け入っても 分け入っても 青い山」が知られるが、当時の私が心惹かれたのは、「この道を たどるほかない 草の深くも」であつた。受験が都会ほど深刻でなかつた小さな離島育ちとは言え、中三で受験勉強を頑張るしかな

い切迫感が、この詩への共感につながったのだろう。学校から帰って、友達と集落の海岸の芝生の上に座り、ひと時を語らうのが日課であった。台風前であろうか、遠くのサンゴ礁の岩にゴーツと激しくぶつかる。ビルの何階分だろうか、大きく跳ね上がる大波を眼前に、彼の詩が頭の中を何度も押し寄せては返すのを、今でも鮮明に覚えている。

教員になって、卒業文集でメッセージを依頼されることが多々ある。その度に、私は、この山頭火の「この道を たどるほかない 草の深くも」を卒業生に送っている。決めたこの道（進路）を行くしかないと覚悟を決め、全力を尽くすしかないと覚悟したように、平成・令和の子たちに響く場面もあろうかと。

ある日の校長講話



すごい未来を生きるみんなへ

安納小(熊) 高瀬 信幸

みんなが勉強したり、お友達と元気に遊んだりしている今も、世界はどんどん新しくなっています。みんなが大人になる頃には、今よりもっとすごい時代がやってきます。コンピューターやロボットが、みんなの生活を助けてくれるようになります。この未来の社会を「Society 5.0」といいます。今日は、そんな未来でみんなが楽しく活躍できるように、大切なお話を三つします。

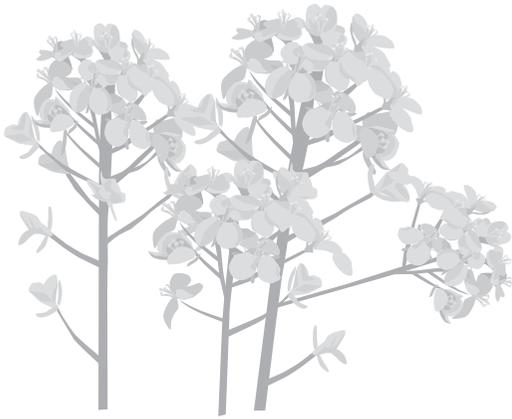
一つめは、「どうして?」と考える気持ちをお大切にすることです。毎日、いろんなものを見て「どうしてこうなるんだろう?」と、思うことがありますよね?その「どうして?」は、み

んなだけの特別な宝物です。コンピューターは答えを出すのが得意ですが、新しい質問や誰も思いつかないアイデアはつくれません。「どうして?」と「やってみよう!」の気持ちこそが、未来をつくる力になります。だから、いつも不思議に思う心を忘れないでください。

二つめは、みんなで協力することです。未来の世界は、世界中の人たちが一緒に働き、生活する社会です。話す言葉や考え方が違う人と力を合わせるには、「ありがとう」や「ごめんね」を言うことがとても大切です。学校で意見がぶつかったときは、まず相手の気持ちを考えてみましょう。助け合えば、一人ではできないこともできます。みんなで力を合わせて、一つの大きな目標を達成する喜びを大切にしてください。

三つめは、道具を上手に使うことです。学校で使うiPadは、みんなの勉強を助ける楽しい道具です。でも、国語や算数など、今のお勉強をしっかり頑張らないと、コンピューターの情報が正しいかどうか判断できません。「知りたい!」「もっとやってみたい!」という好奇心があれば、どんな時代でも学び続けることができます。未来で活躍するために、今の学びをお大切にしてください。

みんなは、すごい未来をつくる主人公です。毎日を笑顔で過ごし、未来でキラキラ輝くことを、心から願っています。



自分の「強み」を知り、

それを生かす生活を

春山小(市)猿 渡 功

四月十八日、レスリング金メダリストの文田選手と鏡選手が春山小に来てくれた日の夜、校長先生は、文田選手とそのお父さんにも会って、色々な話をしたところです。

文田選手に「どうしてレスリングをしようと思ったのですか？」と、聞きますと、「自分は、そんなに身体は大きくないし、走ったり、泳いだり、チームでプレーすることは、そんなに得意ではない。けれど、レスリングだったら、自分の体重に合わせたプレーをすることができるところでは。」と、思ったそうなのです。

続けて「金メダリストになることができた一番の要因(理由)は何だと思えますか？」と、尋ねました。すると、しばらく考えてから、「やはり、まずは、自分の特徴をよく知って、それに合わせた練習を自分で組み立てたからだと思います。」と、言ってくれました。どういふことかといえますと、選手はそれぞれ、体格やタイプが全く違います。例えば、文田選手は休む時には、しっかりと休んでリフレッシュして、次の練習に臨んだ方がいい結果になるそうです。最初は、他の人と同じようなトレーニングをしていたのですが、それでは、勝つ時もある

し、負けることもある。そこでどうやったら強くなるかを真剣に考えた。結果、自分の「強み」は何だろうと探して、身体が柔らかいという強みをとことん信じて、それに合うトレーニング法を必死に考えて実践したのです。そうすることで、更に強くなり、外国選手にも負けなくなったそうです。

このことは、みなさんも一緒だと思いました。一人一人、それぞれの「強み」は違います。他の人と比べる必要はありません。読書が好き、人、運動するのが好きな人、算数の難しい計算を解くのが好きな人、昆虫だったらいつもお世話をしたい人、星が大好きで、ずっと眺めていられる人など様々です。大事なことは、自分の「強み」は何かということをよく知って、それを生かす方法を自分で考えていくことが、成功の鍵だったのです。

渡り鳥のV字飛行

卒業生へ贈る言葉

祁答院中(北) 鎌 田 克 朗

三月になり、春の気配が少しずつ感じられるようになりました。空を見上げると、北へ帰っていく渡り鳥の群れが、Vの字の形で飛んでい

る姿が見られます。実は、このV字の形には、仲間同士の支え合いが込められています。

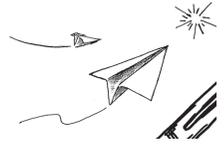
先頭の鳥が羽ばたくと、後ろに風の流れが生まれます。後ろの鳥たちは、その風に乗ることで、少ない力で飛ぶことができます。つまり、一羽で飛ぶよりも、仲間と力を合わせることで、ずっと遠くまで飛ぶことができるのです。

しかし、先頭の鳥は一番風を受けるため、疲れやすくなります。しばらくすると、後ろにいる鳥が鳴き声で励ましたり、入れ替わって交代したりします。また、けがをした鳥が出ると、二羽の仲間がその鳥と一緒に降りて、回復するまで寄り添うと言われています。仲間を思いやり、助け合う心が、旅を続ける力になっているのです。

卒業を迎える三年生のみなさん。みなさんも、この学校で仲間と支え合いながら成長してきました。うまくいった時も、うまくいかなかった時も、そばには一緒に歩んできた仲間がいます。これからは、それぞれの進路へ飛び立つこととなります。新しい環境では、はじめは不安を感じることもあるでしょう。

でも、渡り鳥のように「助け合う力」と「信じる心」を胸に進んでください。みなさんは、もうしっかりと自分の翼を持っています。仲間を支えられ、仲間を支えながら、それぞれの空へ大きく羽ばたいていくことを、心から応援しています。

話のひろば



ふるさとを愛する

高尾野小(北)
尾崎裕樹

新任校長として、四月に出水市立高尾野小学校へ赴任することとなった。出水の新家を出てから、

三十六年ぶりに故郷へと帰ってきた。子供のころ、何にも無かった出水市であったが、新幹線の駅ができ、大型のショッピングや大手ハンバーガーチェーンなどがあり、便利な町になったものだと思う。あまり変わっていないのは子供たちである。今も昔と同様に明るく元気で、一生懸命に遊んでいる。

高尾野小学校では、郷土に愛着をもち、よさを実感する教育活動を大切にしている。本校では、低学年が地域の自然、公共施設などについて学んでいる。中学年は、高尾野のよさ、出水の鶴、地域の高齢者とのふれあいなど、より広い視点でふるさとを学んでいる。高学年は、地域の環境、地域を支える肥薩おれんじ鉄道、日

本・世界の文化、台湾仁愛國小学校との交流など世界にまで目を向けていく。小学校六年間を通して、地域を学び、日本・世界を学び、そして、出水、高尾野を見直し、見つめ、好きになることをねらっている。郷土の人、素材を活用し、郷土に対する理解を深め、郷土を愛する子供たちに育ってきている。

そう言いながら、実のところ、出水出身者である私自身が出水のことをよく知らない、覚えていないことに気が付き、恥ずかしい気持ちになった。麓の武家屋敷群、クレインパーク、東光山公園、上場高原のコスモス、出水市高尾野郷土館などを再度見て回った。肥薩おれんじ鉄道も積極的に利用している。また、小・中・高校時代の先輩や同級生、当時お世話になった人などと再会し、再びつながりができた。地元ってやっぱりいいなと思うようになってきた。

地元に戻って考えたことは、教師自身が地域のことを知り、意図的に地域のよさを子供たちに気付かせていくことが大切であるということである。子供と地域のよさを一緒に見付け、共有するとよい。教師と子供が地域のよさを実感できるよう、カリキュラムを工夫していきたいと強く思う。私のような郷土に無関心な大人にならないように。

一期一会

おかげさまで

漆小(始伊)

白水理恵

今の私があるのは、すばらしい先生方との出会いがあったおかげだと感謝している。

例えば、小学一年生の時の担任の先生。定年間近の穏やかなおじいさん(子どもの私にはそう見えた)先生。学校の側の御自宅に、日曜でも遊びに行った。書道をたしなむ方で、じつと見ていると、一緒に筆を握らせてくださった。作文の添削を熱心に行っていた記憶もある。先生が多忙な時は、優しいお姉さん(娘さん)が庭で遊んでくださった。美しい文字と文章を書くことの大切さや、子どもに温かく接する心の豊かさを教えてくださった、偉大な師である。

次に、「校長室で勉強会をするよ。」と声を掛けてくださった校長先生。「いえ、私はもう年なので。」と即答すると、「年は関係ないんだよ。学校全体が見えるって楽しいこと。絶対にやってよかったと思うから。」と誘い込まれた。本当にバイタリテイに富んだ行動力のある方だった。わずか二年で、児童の学力を市内トップに押し上げた敏腕校長である。

さて、その勉強会やゼミは、何とも魅力的なものだった。あつという間に時が流れ、次も話が聞きたい、もっと知りたいと毎回わくわくした。気付けば、ファイル一冊分の財産ができた。

今でも、それを開き学び直す時がある。その度に、「全力で頑張っているか。」と笑顔で叱咤激励されているような気分になる。教育への情熱と信念を学ばせてくださった大先輩である。

そして、管理職になってから御縁があった三人の教育長先生。圧倒的な存在感と風格、凛とした佇まい、それでいて親しみやすいお人柄。講話は勿論のことだが、何気ない会話の中にも常に人間味があふれている。人としての在り方を体現させた尊敬する方々との出会いである。

人や仕事との出会いは一期一会。私は他と比較するのではなく、「おかげさまで」と自身自身を見つめたい。その上で、これまで学ばせてくださった方々の思いに、ほんの少し自分色を加えて、子どもたちや後輩教職員に喜びや希望を与えられたら、何て素敵なことだろう。その目標達成に向け、今日も努力を重ねていたい。

セレンディピティ

を高める

田皆中(大)
菅野 公平

令和七年度、二人の日本人が生理学・医学賞と化学賞の分野でノーベル賞を受賞した。科学の世界で日々研究を続け

てきたこの二人が共に述べていることの中に、

運・鈍・根という共通した言葉がある。運は、幸運に恵まれること、鈍は、周りに流されない鈍感さがあること、根は、根気強く続けること、人との出会いも運だという。

この運については、二〇一〇年にノーベル化学賞を受賞した鈴木章氏が、セレンディピティという言葉で語っていたことが強く心に残っている。セレンディピティとは、「思いがけない偶然がもたらす幸運やその才能」を意味している。鈴木氏は、「何もしない人にはセレンディピティに接する機会はない。一生懸命に努力し、真剣に新しいものを追求する人だけにチャンスが訪れる。」さらに、「大きな発見や幸運は、偶然から生まれる。セレンディピティは、人間誰にでも平等にあるが、それを生かすには、注意深さ、努力、謙虚さが必要だ。」とも語っている。

セレンディピティを高める鍵は、日頃から挑戦する意欲や粘り強さ、過信せず努力を続ける姿勢にある。さらに、その運を引き寄せるためにはアンテナを高くし、気付き力を身に付けることも必要な条件だといえる。

学校は、生き物のようなもので、日々変化し成長している。想定外の出来事や難しい状況に對し校長として対応を迫られることがある。必要と思われる情報を集め、根拠をもって最善と判断した策を講じて実践し、困難なときもあき

らめず努力を続けている。それでもどうしてもうまくいかないことがあったとしたら別な方法を試し、時には折り合いを付けながら事案に對応することが大切だと考え取り組んでいる。

今後の学校経営においても、思いもよらない状況が訪れるであろう。校長としてまだまだ未熟だが、目の前の課題や出来事に対して「なぜそうなのか」、「本当にこれでよいのか」と自問自答しながら本質を見抜く力を磨き、多様な立場にいる他者の意見や気持ちに想いを巡らせ、自身の願いや考えを誠実に伝え、予測困難で多様な時代に對応するための運を手練り寄せられるよう、自身に課せられた職務を全うしたい。



読書案内



町 健次郎 著

奄美妖怪考

日本と琉球、そのはざまの怪異誌

諸鈍小中(大) 赤 池 夏 樹

本書は、喜界島・奄美大島・加計呂麻島を含む奄美群島に伝わる怪異、すなわち「ムン(ムヌ)」の世界を、郷土誌と島の人々の話をもとに構成した初の本格的なムン論です。著者の町健次郎氏は与論島生まれであり、現在、瀬戸内町立図書館・郷土館館長を務めておられます。町氏とは、私も同町で勤務している関係で、何度かその講演を拝聴する機会に恵まれました。奄美の深遠な歴史や文化にまつわるお話は、毎

回、時間を忘れて楽しく聞き入ってしまうほど、魅力的で奥深いものです。奄美群島は、歴史的に日本(ヤマト)文化と琉球文化が重層しつつ、島ごとに個性豊かな文化が熟成されてきました。本書は、この文化の「はざま」に広がる怪異の世界を、語彙解釈や様態分類、系譜論など、多角的な民俗学の視点から解説した貴重な一冊です。

私たちの諸鈍小中学校は、国指定重要無形民俗文化財「諸鈍シバヤ」(方言で芝居のこと)をはじめとする優れた伝統・文化を継承し、よりよく発展させていく責務を担う、果たすべき重要な役割があると考えています。児童生徒は、地域の方々(シバヤ保存会など)の指導のもと、歴史学習や踊りの練習に主体的に取り組み、ふるさとに誇りを持ち、伝統文化を守り伝えようとする意識を育んでいます。

郷土への深い理解は、単に芸能の形式を学ぶだけでは達せられません。例えば、奄美を代表する妖怪「ケンムン」が、なぜタコを嫌い、ガジュマルの木に棲むのか、その由来を考えることは、島の自然と人々の生活の知恵、そして畏怖の念に触れることにつながります。

児童生徒が、本書が提示するような、歴史の深層にある島々の人々の感性や畏怖の念(ムン)の世界に触れることこそが、郷土のよさを再発見する機会となるのではないのでしょうか。この

多層的な文化構造と感性の「はざま」を読み解くことは、児童生徒の文化的アイデンティティを深く理解する助けとなり、ひいては、異なる文化圏への興味関心を高め、国際社会を生き抜く力を育むよい機会となるでしょう。教職員の皆様にも、郷土の深遠な文化と感性の理解を促す上で、ぜひ本書を一読されることをお勧めします。

笠間書院 千九百円+税

■ 井上真吾 著

努力は天才に勝る!

江内小(北) 豊 島 秀 世

昨年夏、世界陸上が三十四年ぶりに東京で開催され、多くの人がテレビで観戦したのではないだろうか。中でも十四回目の世界記録(記録:六m三十cm)を更新したデュプランティス選手の高跳びには驚かされた。かつて「鳥人」と言われたセルゲイ・ブブカ選手が三十四年前の世界陸上で出した記録が五m九十五cm。高跳びでは、あれから三十五cmも記録が伸びている。

練習方法や道具の進化、食事管理や体調管理など様々なことが時代と共に変化した結果、このように記録が伸びたのではないだろうか。

一方、百m走では、三十四年前大人気のカール・ルイス選手は九秒八六。今年一位になったオブリク・セビル選手が九秒七七。その差わずか、〇秒〇九。一流の選手が一流のコーチのもと、最新技術を駆使して練習を重ね絶え間ない努力をしても、記録を大幅に伸ばすことは困難であることも感じた。

日本選手団で心に残ったのは、百十mハードル五位の村竹ラシッド選手だ。決勝後のインタビューでは、パリオリンピック後にこの世界陸上に照準を絞り全てをかけて努力してきたことを振り返り、号泣しながら声をつまらせ発したのが「何が足りなかったんだろう……」だった。

この大会を通じて、努力を重ねた全ての人が思い描いていた結果にたどり着ける訳ではないが、思い描いた結果にたどり着けた人は、必ず努力を続けているという現実を身に染みて感じることができた。

今年名古屋で行われるアジア競技大会では、諦めずに努力を続けた村竹ラシッド選手がメダルを掛けた姿を見たいものだ。

本書では、いかにしてあのモンスター井上尚弥・井上拓真兄弟をチャンピオンに育てたかが、努力の大切さとユニークな子育て論で書かれている。諦めないで努力することの大切さを再認

識させられた。

講談社現代新書 八百八十円

■ 重松 清 著

とんび

大笠中(南) 吉 鶴 正 樹

私にとって、読書は、釣りと並んで好きな趣味の一つである。いろいろな小説を読むが、その中で一番を選ぶとしたら、迷わずに重松清さんの書いた「とんび」を挙げる。

この「とんび」の舞台は瀬戸内の小さな町。まつすぐで、不器用で、ちよつと乱暴なヤスさんが、不慮の事故で愛妻を亡くし、周りの人たちに支えられながら、自らのことを省みず、ただただ我が子の幸せだけを願い、一人息子のアキラを育てていく物語。

いつも暴走し、空回りするヤスさんの姿が面白くて気に入った小説であったが、読み返すうちに、親として子への愛情のかけ方や意地の張り方等々をヤスさんのアキラに向かう姿勢から学ぶことが多く、ヤスさんがとんでもなく素晴らしい父親の鏡に思えてきた。

このようなシーンがある。まだ幼いアキラが母親を求めてぐずる。ほとほと困ってしまうヤスさんであるが、お世話になっている和尚から「悲しみは雪だ。雪は地面に落ちるとどんどん積もる。おまえは海になれ。どんなに雪（アキラの悲しみ）が降っても全て呑みこんでやれ。」と叱られる。今、私は教師として、校長として、毎日、様々な事案に対して対応を迫られる日々である。

人を育てる職業である私だが、私は学校で生徒や先生方、そして保護者や地域の方々の思いをしっかりと受け止められているだろうか。海となつて呑み込んでいけているだろうか。

再び「とんび」を読み、「これまでの自分の対応は保身のためではなかったか。」「自分をよく見せようとしていなかったか。」「本当に相手のことを思つての対応であったか。」「ヤスさんの姿から反省させられるばかりであった。

なぜ、ヤスさんが逃げずに、子育てにまっすぐに向き合えたか。ヤスさんは、アキラのことが大好きだったのである。私も、大笠中学校を今よりも、更に好きになって生徒や先生方、そして、保護者の方々や地域の方々と正面から向き合つて校長の職務を全うしていきたい。

角川文庫 千七百二十六円

日々目まぐるしく過ぎていく私の日常。そんな私の精神的な支えとなっている四つの柱、ランニングと山登り、サウナとスポーツ観戦だ。

ランニングは、私にとって最も基本的なルーティンであり、かれこれ数年自分と向き合う時間となっている。体重八十六キロ、体が重く、「これは、やばい、歩こう。」と思いついたあの日、一キロ往復から始め、「おっと、体が軽いぞ、距離を伸ばせるぞ。」と感覚があったあの日。それから時が経ち、「なんか走れそうだぞ、いけるといって走ってみるか。」と思いついたあの日。その日の調子で走れる時間は異なるが、少しずつ距離も伸び、五キロの往復計十キロ走ることができるようになっていた。走る中「気持ちいい、なんか俺ってすごいぞ。軽いぞ。ずっと走っていたい。うーん、気持ちいいじゃないか。」という感覚を感じた。「これがランナーズハイか。」「この感覚をもう一回味わいたい。」走る原動力となった。毎回、感じることはできないが、とてもうれしい瞬間だった。しかし、日々「走りたい」の思いも強くなり、「走らなければ」と無理して走るようになり、膝や腰に痛みが出てきた。残念だが、走れないジレンマも味わいながら、ロードからマシーンへ、週末に痛みを感じる前に終了というルーティンへ変化した。長距離走をこれまで苦手としてきた自分だが、音楽にあわせて、自分の息づかいと足音だけが聞こえ、自分と向き合える魅力に今も取りつかれている。

趣味・文芸

自分と向き合う四つの柱

和田中(市)岩城 靖一郎

次に、山登りである。自分の好きな山「天孫降臨の神話の舞台 高千穂の峰」、「山岳信仰の霊山 冠岳」そして「開聞岳」である。ランニングと同じように一歩一歩の積み重ねが自分を形作る。雄大で厳かな山が自分を試してくる。「お前は、この試練を乗り越えられるか。耐えられるか。山頂にたどり着けるか？」いつも山からの問いが待っている。息絶え絶えだが踏ん張り登っていく。五感をフル活用し、鳥のさえずりや木の葉の揺れる音、すれ違う方々や追いついて行かれる方々の励ましの声や軽やかな足取りが、自分の力となり、前へ進める。山頂

タが再起動した後のようなクリアな状態になっていく。思考が冴え、集中力が増し、穏やかな気持ちで再び日常に向き合える。サウナは、ランニングや山登りと同じくらい、私の精神衛生上重要な心と向き合う時間となっている。

最後に、スポーツ観戦に熱狂する。球場やアリーナでのプロ・アマチュア問わずのライブ観戦は、日常の抑圧された感情を解放する。その人を知り、その人を支える方々を知り、現在までの道のりへの努力や思いが、自分自身を奮い立たせる。全ての方々が織りなす一瞬一瞬のドラマに私は心から感動する。努力や感謝から生

み出される奇跡的なプレーは、私に強烈なエネルギーをもたらす。応援をしている方々の心にも素晴らしさを感じる。自分のことのように喜び、悔やしがり、声を枯らして応援する姿はいつも感動する。特に、中学生や教え子の真剣なまなざしや仲間と切磋琢磨し、一つのプレーを積み重ねている姿は最高である。日常では見せない姿も新たな感動につながっている。保護者の応援も素晴らしいし、応援される子どもたちと一緒に見守りたいと感じる。観戦することで得られる興奮と感動は、私の人生を彩るものだ。

もう一つの自分と向き合う時間はサウナである。よく耳にする「ととのう」という言葉。ランニング終了後、山登り終了後、そしてとても疲れている日、必ず温泉へ向かう。ゆつくりと体を温めた後、八分×三セット、当然インターバルは水風呂、外気浴である。特に水風呂は、「ふー、気持ちいいぞ。」と脳の隅々、体の隅々まで冷たさが行きわたる。まるで、コンピュー

スこそが充実した生活を送る鍵である。

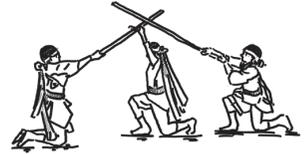
ランニングで自分と対話し、山登りで自然と対話し、サウナで精神を整え、スポーツ観戦で感情をゆさぶられる。この四つの柱は、相乗効果を生み出している。動くことで活力を得て、休むことでその活力を定着させる。このバランスこそが充実した生活を送る鍵である。

垂水市の魅力と

未来への志

垂水小(隅)

山下裕司



垂水市は、鹿児島県大隅半島の西北部、穏やかな鹿児島湾に面するほぼ中央に位置しています。東は高隈連山によって鹿屋市に接し、北は霧島市福山町と境を接しています。西側の海岸線は約四十キロメートルに及び、その中央付近で桜島と接続している、恵まれた地形を持つ自治体です。

多様で豊かな自然環境を最大限に活かし、垂水市では、季節ごとの美しさや体験を際立たせる「六大観光名所」を設定し、多くの観光客の皆様をお迎えしています。

まず、一つ目の名所は、垂水市の山間部標高五百五十メートルに位置する「高峠つづじヶ丘公園」です。毎年四月下旬から五月初旬にかけて、自生する「サタツツジ」が山全体を赤やピンクに美しく染め上げます。二つ目は、市街地から車でわずか十分ほどの近場にありながら、大自然の魅力を満喫できる「猿ヶ城溪谷と森の駅たるみず」です。こちらでは、渓谷でのキャニオニングやトレッキングといったアクティビ

ティ、自然の中でのお菓子作り体験などができます。

三つ目に特筆すべきは、秋の絶景として知られる「垂水千本イチヨウ」です。この地は元々荒れた山でしたが、約五十年前から園主の中馬さんご夫妻が私財を投じ、約五ヘクタールの土地に千二百本以上のイチヨウを植え育てた「黄金の楽園」です。四つ目と五つ目には、桜島と錦江湾の景色を楽しむための拠点となる二つの道の駅が設定されています。桜島の北側には「道の駅たるみず」があり、全長六十メートルの足湯が名物です。ここでは旅の疲れを癒やしながら、雄大な展望を味わうことができます。一方、桜島の南側に位置する「道の駅たるみずはまびら」にはマリナーパークがあり、サップやバナナボートなど、手軽なマリナーアクティビティを体験できます。最後となる六つ目の名所は、垂水市の南部、鹿屋市との境に近い国道沿いにある「まさかり海岸」です。こちらからは、対岸の薩摩半島と、その南端にある美しい姿の開聞岳、そして北には桜島を望むことができる風光明媚な海岸です。背後には真っ白い断崖絶壁がそびえ立ち、小さいながら遠浅で波静かなビーチとなっています。このように垂水市では、土地の恵みを十分に生かした観光名所が、比較的近い範囲に点在しており、効率的に巡ることが可能です。

垂水市を代表する産業の一つが、「カンパチ・ブリの養殖」です。鹿児島湾の穏やかで温暖な海域は、養殖に非常に適しており、現在、垂水

市漁業協同組合は、単一漁協としては日本一のカンパチの産地として知られています。ブリも多く養殖されて海外へ輸出されるなど、これらは市の基幹産業となっています。この漁業を活かした取組として、近年は教育旅行にも力を入れていきます。

市街地の中心にある垂水小学校の校長室には、学校を設置した明治時代の地頭・高崎正風が記した「学制」が飾られています。これは現在でいう教育課程にあたり、正風が学校を設立する上での熱い願いが込められたものです。明治維新後の混乱期において、高崎正風は地頭として「士気振興風俗淳美」（地域社会の規律と道徳の回復）を使命とし、学校設立をその核心的な手段と考えました。彼は、学校の目的を地域の子弟教育に留めず、国家の近代化に資するという高い目的に結び付け、古来の教えと現代の情勢のバランスを取りながら、実用的な目的に基づいた学則を設定しました。この革新的な理念を参考にしようと、当時は県内各所から見学に訪れる人が多かったという記録も残っています。この歴史と伝統を背景に持ちながら、現在の垂水市は、最新のIT教育を推進する「GIGAスクール」のまちでもあります。高崎正風の前駆的な教育理念は、現代の伝統と革新のバランスを重視する市の姿勢に深く通じていると言えるでしょう。

垂水市は、豊かな自然の恵みを守り、その上に築かれた歴史と革新の教育理念を両輪として、これからも発展を続けてまいります。

専門部だより

〈総務部〉

一 各地区校長会との連携

各地区校長会との連絡会は、鹿児島市、鹿児島郡、日置、南薩、始良・伊佐、大隅、熊本、大島の八地区で開催できた。

連絡会では、九州・全国大会への参加及びその予算、中学校部活動地域移行の進捗状況、教員不足・後継者育成問題、働き方改革などについて意見交換がなされた。今後は県教育委員会からの情報共有に努め、学校間連携を更に図ることを確認した。

二 教育機関・諸団体との連携

県教育委員会との連絡会(七月二日)では、教育長、副教育長、教育次長、各課長との意見交換を行うことができた。

県PTA連合会との連絡会(七月十一日)では、多様化する時代の中、PTAとの連携の在り方や様々な取組状況などについて意見交換がなされた。

県教頭会との連絡会(九月三日)では、「教頭の業務改善に関する意見集約」の結果を基に情報交換がなされた。

県退職校長会との連絡会(九月二十六日)では、「地域とともにある学校づくり」について協議がなされた。

教職員課との連絡会(十一月十八日)では、管理職の異動と任用、役職定年、「公立の義務教育諸学校等の教育職員の給与等に関する特別措置法」改正等に伴う教員給与の見直しなどについて意見交換がなされた。

三 学校予算に関する要望活動

各地区校長会・県立学校からの要望を集約した要望書を作成し、十月二十八日、県教育

委員会に対して学校予算に関する要望を行った。

教職員の配置改善の面では、県立学校の情報担当専門教諭等の配置拡充や各専門職員の導入等の要望を行い、施設・設備の面では、県立学校の老朽化に伴う改修等の予算化について要望した。また、その他の項目において、教育DXの実現に向けた予算確保等について要望した。

県教育委員会からは、令和八年度の国の概算要求等を注視しながら、今回の要望を踏まえ、必要な財源確保に努めていくことなどの回答があった。

四 その他の各種会合の開催

日本教育会全国教育大会は、「自らの頭で考え判断し、表現する力を育てる教育」を主題として、オンライン方式を併用して十一月一日に大阪で開催された(参加者約五百人)。

〈研究部〉

一 鹿児島県小・中学校長研究大会開催

〈大会主題〉

「あしたを拓き、心豊かでたくましく生きる人間の育成を目指す学校教育の創造」

本年度の研究大会は、宝山ホールを全体会場として、十三の分科会場を含む全ての会場を公共施設を利用して実施した。各会場への移動や使用後の後片付け等、不便や負担をおかけしたが、参加の校長先生方の御理解と御協力の下、滞りなく実施できたことに感謝したい。

研究部では、前年度に各地区の研究発表校を決定していただき、実践に基づいた中身の濃い分科会での審議を期待して、発表者と連絡を密に取りながら研究を進めてきた。各分科会の研究主題を貫く考えは、学校経営上ど

のように実践が展開され、成果と課題が何かを明確にすることとした。そうすることで、分科会に参加した校長先生方の学校経営に生かすことのできる汎用的な実践例となると考えたからである。

講演は、日本PTA全国協議会会長であられ、本県のPTA会長としても長きにわたって組織及び活動を支えてこられた太田敬介氏を講師に迎え、PTA誕生から今日に至るまでの歴史を振り返りながら、時代の変化に応じて活動を進化させてきた歩みを御教示いただいた。大人も子供も笑顔でいられる社会を目指し、学校・家庭・地域が支え合うことの意味を改めて深く考える契機となった等の声が多く聞かれ、好評であった。

なお、来年度の県大会は十一月十二日(木)に、鹿児島市中央公民館にて開催予定である。

二 九州・全国の研究大会

令和七年度の九州・全国の研究大会は、次のとおりであった。

□ 全国連合小学校長会研究協議会・

九州地区小学校長協議会研究大会福岡大会

亀徳小 越間むつみ 校長(第十分科会)

日吉学園 松元 智 校長(第十三分科会)

全九州中学校長研究大会熊本大会

日吉学園 松元 智 校長(第十三分科会)

全日本中学校長会研究大会香川大会

志布志中 徳重正宏 校長(第七分科会)

令和八年度の全九州中学校長研究大会、並びに、令和九年度の九州地区小学校長協議会研究大会は、両者とも鹿児島大会の予定であり、開催県となる。

末筆になるが、令和七年度の県内外の研究論文執筆・発表及び分科会運営に御協力いただいた校長先生方に衷心よりお礼を申し上げます。

たい。

〈人事給与部〉

「令和七年三月の人事・給与に関する意見と令和八年度への要望」及び「教職員の人事評価制度に関する意見・要望」について、全校長にアンケート調査を実施し、その結果を基に、十月二十八日の「県教育委員会への要望の会」において、次の点を主に要望した。

一 人事異動について

(一) 校長が、より主体的に学校経営を推進できるよう、人事異動に関する校長の具申を尊重するとともに、発表までのスケジュールをできるだけ早めるよう配慮されたい。

(二) 採用年齢の引き上げや退職年齢の引上げに伴う、人事異動の標準の見直しについて検討されたい。

(三) 教頭の業務を補佐するために、定数増による主幹教諭職の導入を検討されたい。

(四) 役職定年制について、役職の新設や管理職での継続勤務を含む人事上の措置を検討されたい。

二 給与について

管理職の給与や手当等については、職責に見合う処遇の改善を図られたい。特に教頭職については、手当の引上げについても検討されたい。

県教育委員会からは、各地区及び学校の課題を十分に配慮した上で、引き続き人事異動の標準の趣旨に基づき、適切に対応していくこと、主幹教諭の導入については、多くの効果が期待されるので、引き続き関係部局と検討を進めていくこと、役職定年制については、本制度の趣旨や運用について、引き続き丁寧な説明し、全ての教職員が意欲をもって勤務できるように努めること、管理職の処遇については、国や他県の動向を注視しながら引き続き検討していくこと等の回答を受けた。

〈広報部〉

令和七年度も会員の皆様の御協力により、当初の計画に基づいた広報部の活動が円滑に進められたことに感謝いたします。

一 月刊「鹿児島島の教育」

「随想」は、県下各地の様々な分野で活躍しておられる方々に玉稿をいただくことができた。教育職以外の方々のお考えや思いにふれ、人として生き方の幅を広げることができた。また、会員の提言や実践事例、各種話題等はそれぞれ特色があり、学校経営にも活用することができた。次年度以降は発行回数削減(隔月刊行)を図る予定である。

二 特集号「鹿児島島の教育」第七十一号

特別寄稿として、鹿児島県身体障害者福祉協会障害者スポーツ部長の前田究氏には、目標は変えずに方法を変えて挑戦することの大切さを、城山ホテル鹿児島取締役執行役員総料理長の徳重慎一郎氏には、料理人としての生き方やおもてなしと真摯な心について御教示いただいた。なお、特集号は、今年度をもって最終の刊行となる予定である。

三 「師の道」五十四号

昨年度から役職(校長職)定年を迎える皆様に執筆を依頼している。本年度は令和七年度に役職(校長職)定年を迎える皆様からの原稿を編集し、年度末に刊行予定である。

次年度以降も役職(校長職)定年を迎える方々には八月末日の原稿提出について御協力をお願いしたい。

先輩校長の歩いてこられた教職への熱い思いに敬意を表するとともに、御協力に心から感謝申し上げます。

編集後記



三寒四温の言葉どおり、寒暖が繰り返されるが、日差しには春の暖かい光を感じ、花園の花々が色鮮やかに咲き始めるこの三月は、一年で最も感慨深い惜別の情を感じる季節でもあります。

さて、本号で今年度の編集業務も無事締めくくりに時を迎えました。今年度、十回の発行に際し、御多忙の折、玉稿をお寄せくださった皆様に厚く御礼申し上げます。

お寄せいただいた一つ一つの取組を拝読しておりますと、そこには地域の実情や子供たちの実態を踏まえ、真摯に課題解決へと挑む校長先生方の確固たる信念と、創意工夫に満ちた情熱を感じます。不登校支援、地域と共にある学校づくり、そして教職員のウェルビーイングの向上等、今日の学校が直面する困難な課題に対し、学校のリーダーとしていかに舵を取り、教職員と共に歩んでこられたか。その真摯な実践からは、同じ校長という職責を担う私自身も、多くのことを学んでいます。

校長という職責は、時に孤独な決断を迫られる場面も少なくありません。しかし、こうして誌面を通じて先生方の英知に触れることで、視界が大きく開けるような感覚を覚えます。他校の取組に学び、自校の経営を省みるというこの知の循環こそが、本校長協会が長年大切にしてきた研鑽の伝統であり、私たちの最大の強みであると再確認いたしました。多様な視点、多角的なアプローチに触れることは、自身の教育観をより一層深め、次なる一歩を踏み出す意欲を与えてくれました。

最後になりますが、本誌が、皆様にとって日々の子供たちの笑顔あふれる学校づくりへの一助となれば幸いです。皆様の益々の御健勝と、各学校の更なる発展を心より祈念いたします。編集後記とさせていただきます。

祝 健二郎(鴨池中学校)